

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02929

研究課題名（和文）英文法指導に適した例文条件とその効果に関する理論構築と良質な例文集の作成

研究課題名（英文）A Study on the theory development and list-making of example sentences suitable for English grammar instruction

研究代表者

中住 幸治（Nakazumi, Yukiharu）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：20758875

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず英語検定教科書内の英文法例文の質的検討を通じて教材内の英文法例文及びコミュニケーション要素に欠く文法事項の導入状況に関する問題点を指摘した。その後高校生504名対象の質問紙調査とこれまでの研究からの結果に基づき、英文法指導に適しコミュニケーションへの応用が可能な英文法例文の条件に関する基盤理論を構築し図式化した。最後にコミュニケーションに応用可能な英文法指導用英文リスト作成に向けて検索項目案を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、その適切な質的条件について議論が分かれていた英文法例文について、英語教材と学習者対象の調査を通じて一つの理論として構築・図式化を行った。これによりインプットの最小単位といえる例文に焦点を置いた研究が国内外で進む契機となることが期待できる。英語指導者にとっても、例文を検索又は創作する上での一つの基準となるだけでなく、学習者も英語学習への意欲関心が増すだけでなく自律的学習への契機となることが期待できる。本研究ではさらに例文リストの検索項目案を提示したが、これにより例文リストを作る際に例文や意味以外に掲載すべき項目に関する議論が深まることが期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, the quality of example sentences for English grammar instruction in MEXT-authorized textbooks was examined and a number of problems were pointed out regarding their quality or less communicative introduction of certain grammatical items. Based on the findings from a questionnaire conducted among 504 senior high school students and other studies in the past, the base theory on the structure of example sentences suitable for grammar comprehension and their practical uses was described and graphically organized. Lastly, possible categories to include in a list of sentences usable in communicative grammar instruction was introduced.

研究分野：英語科教育

キーワード：英文法 例文 学習者 指導者 教科書 機能

1. 研究開始当初の背景

(1) 英文法例文はほぼ全ての文法教材に掲載されており、該当文法項目が実際に使われることを視覚的に確認できる貴重な input(受信)言語材料であり、実際のコミュニケーション活動にも応用が可能、等多くの利点が考えられる。しかしながら現状は、「例文内容が無味乾燥で、実用性に乏しい(加藤, 2009)」ケースが多く見られる。質の悪い例文が英文法指導に使われる結果、「例文は文法や語法を教える際の「手段」として利用される」だけで「その分軽視される(橋本, 2000)」現状にある。さらに斎藤(2001)は「文法偏重の教育に対する反省と、言葉はコミュニケーションで楽しく学ぶべきという思い込み」から「教科書や文法書の丸暗記が敬遠」されがちな現状を憂慮している。また白井(2012)は学習者や教員等が、例文等を無視して単語と文法規則だけ覚えていれば外国語の習得が可能だと考える傾向を問題点として指摘している。さらに、近年はタスク中心の言語指導が脚光を浴びているが、そもそもタスクの効果的な構築のためには例文の良質さは不可欠なはずである。良質な例文の条件に関しては 1) 印象・インパクト, 2) 学習者の興味関心, 3) 文脈, 4) 文法的必然性, 5) リズム, 6) 語数, 7) 語彙の難易度, 8) 複数文構成, など様々な視点から異なる意見が散在し、系統別の整理もなされておらず理論構築も不十分である。

理論構築において注目するのは、Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1999)が提唱した、言語及び文法を構成する 3 要素(dimensions)である 'form (形)・meaning (意味)・use (活用) ' という観点である。英文法例文とは指導目標文法事項が実際に英文の中で使用されている例であるため、本来はこの 3 要素を全て内包することが求められるはずである。言語は「聞く・話す・読む・書く」という 4 技能によるコミュニケーションの手段として用いられる。これらを基盤として理論構築を図ることで、'form, meaning' に偏りがちであった伝統的な英文法指導から 'use' もバランスよく含む英文法指導への転換を図ることが期待できる。

(2) 学習者と教員は、英語授業で英文法学習及び指導展開の当事者である。その意味で授業実践及び学習者や教員の視点も英文法例文の質を考える上で重要な要素である。過去の研究では、1) 学習者・教員とも既存の英文法例文の質に不満を持っていること(中住, 2013), 2) 良質な例文を用いた英文法指導により、指導後の文法理解がその後も維持される可能性が高いこと(中住, 2014), 3) 学習者・教員間で、また文暗記向き・文法理解向きの例文間で、良質な英文法例文条件の妥当性に温度差があること(中住, 2016), 等が示唆されている。しかしながら英文法例文に関して学習者の視点に基づく研究は未だに限定的である。

(3) 実用・実践という観点から、英語指導者が文法指導に適切な例文検索をできるように、良質な英文法例文集についても考える必要がある。過去の書物では、『英語指導法ハンドブック 英文用例編』(垣田(編著), 1989)という、主に 'form, use' をカバーした例文集があるが、出典例文が古くなり、英文の意味もやや難解である。またオンライン上では "SCoRE" (中條, 2014) という例文検索サイトが開設されており文法事項及びレベル別検索が可能であるが、'use' の観点の充実を含めて検索項目でより多様なリストがあればより有益ではないかと思われる。

2. 研究の目的

(1) 第一の目的は、過去の英文法例文に関する研究や議論、英語検定教科書等の分析、学習者対象の質問紙調査の結果等に基づき、英文法例文の質的条件に関する理論構築を行うことである。その成果に基づき英文法例文を検討・検索・創作することで、'form, meaning, use' の 3 要素全てを内包し且つ、状況に応じてバラエティーに富んだ英文法例文の提示が期待される。

(2) 第二の目的は、上記の成果に基づき良質な英文を文法事項ごとにまとめたリスト作りに着手するために、form, meaning, use それぞれ別の観点から検索可能対象を検討することである。リストの完成により、現場教員が良質な英文法例文を容易に検索し、英語授業のあらゆる場面で応用可能となる。学習者にとっても英文法理解深化だけでなく自律的学習の促進が期待できる。

3. 研究の方法

(1) まず入手可能な高等学校英語検定教科書「コミュニケーション英語(以後 CE) I, II」「英語表現(以後 EE) I, II」と海外出版 ELT 文法教科書から英文法例文だけでなく対話例等も抽出し、英文法例文の質的状況や掲載文法事項等について検討・分析した。

(2) 質問紙調査をある県の高等学校 3 校の計 504 名の学習者を対象に行った。質問項目は英文法例文の質的条件 form 10, meaning 12, use 16 の計 38 項目で、1) 新出文法事項導入時、2) 新出文法事項学習後、それぞれにおける支持度を 5 件法で尋ねた。回答収集後、回答番号を数値に置き換えてデータベース化した。分析は主に *t* 検定、分散分析並びに効果量 *d* 等を用いた。

(3) 上記の結果と先行研究等に基づき、良質な英文法例文に関する基盤理論を構想し、図とともに提示した。

(4) 英文リスト作成に向けて、著作権等を考慮した上で英作文例文としての質的条件を満たすことを検討した結果、まず試作品として「ことわざ」をリスト化することとした。収集した英文こ

とわざの特徴と、(3)で示した良質な英文法例文に関する基盤理論に基づき、検索対象とすべき項目として form, meaning, use それぞれから何を選ぶべきかを検討し、excel 上での例文リスト作成に着手した。

4. 研究成果

(1) 高等学校英語検定教科書内の英文法例文の質については、新科目への移行により改善の見られる教科書もあるものの、正課内容トピックとの関連性や意味内容の深さ等についてまだまだ不十分であること、海外 ELT 教科書と比較して練習問題の中に use との関連性が薄いものが多いことや、‘There is ~’ 構文に関して ELT 教材では「未知情報提供、指示・注意喚起・警告」という状況での使用例が多く掲載されているが、日本の教科書では form と meaning に焦点を当てたわずかな例文しか提示されていない、といった use 面におけるギャップが見られた。

(2) 質問紙調査結果のデータベースを基に、「A: 新出導入時・学習後ともに高評価(=3.50 を上回る)、B: 新出導入時のみ高評価、C: 新出学習後のみ高評価、D: どちらとも低評価(=3.50 以下)」の4タイプを設定し、form, meaning, use 別に検討した。参考までも use に関する結果を表1に示す。

表1 英文法例文の質的条件に関する調査結果: use主条件より抜粋

Type	use主条件	導入時		学習後		検定	
		M	SD	M	SD	t	d
A	学習文法項目を使うべき状況・場面が学べる例文	4.09	0.95	4.07	0.96	ns	.02
A	使われている状況がイメージしやすい例文	4.20	0.86	3.88	1.01	**	.34
A	実際に英語を使うべき場面でよく使われる例文	4.09	1.01	4.28	0.91	**	.20
A	自己表現に応用できる例文	3.94	1.03	4.20	0.97	**	.27
A	ストーリー性のある例文	3.79	0.99	3.87	0.99	ns	.08
B	絵やイラストと共に示された例文	3.59	1.06	3.36	1.11	**	.22
C	ことわざや格言から引用された例文	3.24	1.13	3.71	1.06	**	.43
C	著名人の名言から引用された例文	3.28	1.12	3.69	1.10	**	.37
D	家庭・友人等、身近な題材を扱った例文	3.50	1.01	3.47	1.05	ns	.03
D	住んでいる県や町に関する例文	3.15	1.03	3.32	1.09	**	.16
D	学校生活に関する例文	3.28	1.04	3.38	1.07	ns	.09

**= $p < .01$, ns=有意差なし

(3) ここまでの成果と過去の研究結果を総合して英文法指導に適している英文法例文の条件に関する基盤理論を構想した。図1に従って解説する。

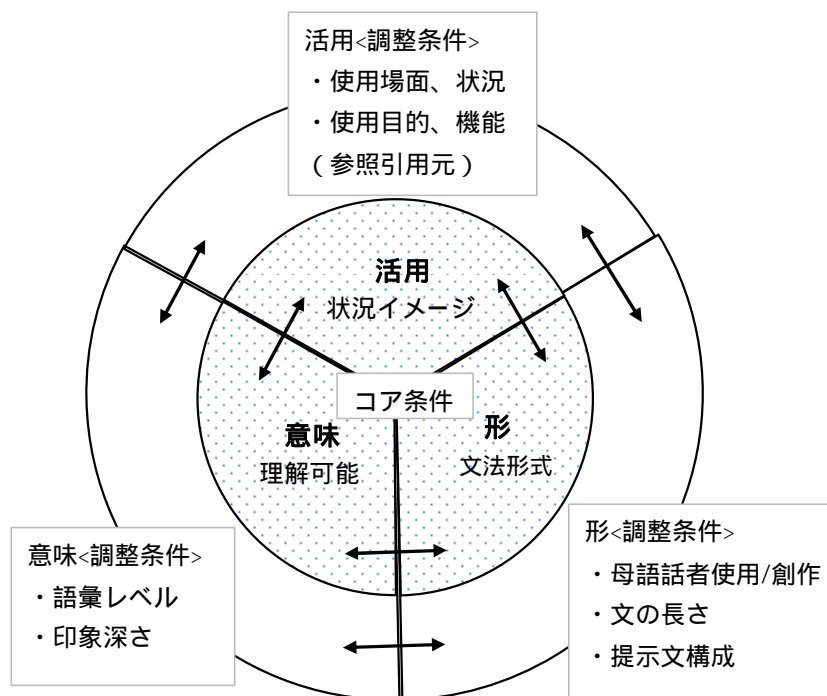


図1 英文法指導に適した英文法例文の条件イメージ

英文法指導に適した英文法例文の条件を整理するためには、やはり「形(form)、意味(meaning)、活用(use)」を基盤とすることですっきりと整理できる。その上で、共通して持つべきコア条件と、複数の選択肢の中から状況に合った要素を選ぶ調整条件を、3要素それぞれで検討すること

で良質な英文法例文の検索や創作，英文法例文の改善が可能になると考える。

コア条件：コア条件とは，英文法指導をする上で最低限必要な条件を指し，特に学習者が新出文法事項に触れる際には慎重に検討すべきである。

形：文法事項を表現するのに必要な形が全て含まれているか。 意味：英文の意味が理解可能(comprehensible)であるか。 活用：英文が使われている状況や場面がイメージできるか。

例) I hurried to the station, but the train **had** already left.

上記例文は過去完了形(had+過去分詞形)を指導対象文法事項と想定している。「形」については，had+過去分詞形だけでなく基準となる過去を示す語句(hurried)が同時に明示されて初めて成立する文法事項であることもこの時点で確認すべきである。「意味」では，日本語では「私は駅に急いだが，列車は既に出た後だった。」となり，「過去の2つの時点をつなぐ出来事を回想する」というコア・イメージが内包されており，且つ意味内容も，過去完了形は分からないまでも，それ以外の語句が学習者に理解又は推測可能であることが求められる。最後に「活用」では，上記例文の場合学習者がこの文から通学時や旅行時等であるとイメージできるのではないかと想定されている。なお上記3要素は分離して検討するのではなく，相互に関連づけて考えることにも留意すべきである。文法事項の形式自体が内包する意味や機能が例文に反映されなければ英文法例文としてはもはや成立せず，例文の意味内容から状況・場面がイメージできなければ，英文法例文としては不十分である。

ではもし例文に上記条件のどれかが欠けていると分かった場合はどうするのか。教員はコア条件を満たすように事前又はその場で適宜例文を補強する必要がある。例えば過去完了形の例文として‘had+過去分詞形’という形しか使われていない場合は，基準となる過去を示す語句を補強する必要が生じる。また上記例文において hurry という単語が学習者に難しいと想定される場合は，例えば急ぐ動作を付けながら例文を発する，run(文中では ran)に差し替える，意味を連想しやすい絵やイラストを挿入する，等が考えられる。さらに use で学習者が例文の使用場面をイメージできないと考えられる場合は，3人称代名詞や抽象的な意味を持つ語句等を固有名詞やより具体的な表現に修正する，station, train という単語をヒントにイメージを膨らませるように促す，状況がイメージできる絵・イラスト・タイトル等を挿入する，等の補強が必要となるであろう。

調整条件：調整条件とは，新出文法事項の指導後にさらに発展応用的指導や言語活動へ移行する場合，新出文法事項の提示に当たりコア条件以上に例文内容を豊かにしたい場合，さらに学習者の習熟度に応じた調整が必要な場合等に，英文をさらに良質化するために検討する条件を指す。これも「形・意味・活用」それぞれ及び相互補完的に検討する必要がある。

まず「形」では，英語母語話者が実際に使う英文だけでなく，教員が生徒の状況を考慮した上で創作した文を使うことが考えられる。これに関して Cook (2001)は「教員によって生徒の状況に合わせて作られた(custom-made)文であれば，気づきの促進(promoting noticing)につながる」と指摘している(但しその時は英語母語話者又は英語が堪能な者に例文を確認してもらった方がよいであろう)。第二に文の長さ(使用語数)についても調整が必要である。新出事項導入時にはある程度の簡潔さが求められるかもしれないが，学習後は学習者の状況に応じて長い文をあえて導入することも考えられる。第三に提示する文(章)形式も調整が必要であろう。例えば，指導対象文法事項の形式上・意味上の違いを顕在化するために，既習のよく似た形の部の文法事項をセットとして以下のように提示することが考えられる。

{ I hurried to the station, but **the train had** already left.
{ **The train left** 30 minutes later than the scheduled time last night.

また，提示文形式を単文から複数文や対話文にするかどうか検討・調整するとより効果的な場合もある。過去完了形を用いた上記内の例文の場合，例文に現在の視点が含まれていないため実際に使用するイメージができない恐れがある。その点を補強するために対話文形式にすることが考えられる。

A: Hey, where are you now?

B: I'm sorry. I hurried to the station, but the train had already left.

上記対話文のように現在形と一緒に使うことで，現在の立ち位置から近い過去(hurried)と遠い

過去(had left)が繋がって起きた出来事を今(I'm)回想している,という状況を示すことができる。

次に「意味」では第一に語彙レベルの調整が欠かせない。新出文法事項導入時は文法事項自体が学習者にとって未知の要素となるため,それ以上の未知の要素を加えないためにも使用語彙は学習者の理解可能な範囲内に留めるべきであろう。しかし学習後は文法事項の知識がある程度既知に変わるため,その分発展応用的要素として語彙レベルを高めた例文を示すことは可能性として考えられる。上記学習者対象調査で「文法と語彙の同時が学べる例文」への支持が高かった(導入時 4.11, 学習後 4.33)ことは注目に値する。第二にどのように学習者の印象に残すかについては,学習者の興味・関心に合う,インパクト,ユーモア,一般常識的な内容,等様々な選択肢が考えられるが,状況に応じて柔軟に取り入れるといいのではないだろうか。

最後に「活用」では,筆記にせよ口頭にせよ,実際に活用されるどの場面や状況を選ぶか,文法事項を使うべき目的や機能のうちどれを用いて焦点を当てるか等を検討した上で提示することで,学習者にその場面や状況,使われている目的や機能を意識づけることができ,実際の英語使用場面での応用が可能となる。前述の対話文の場合,<A is calling B from the train.>という設定文を対話文の前に加えることが考えられる。また教員から提示するのではなく,学習者に自由に状況を発想させるのも有効である。また表1で家族・友人・地元・学校生活に関する例文への支持度が低いことが示されたが,例えばそれらを使って後に自己表現等の言語活動を行うことを学習者に伝えることで,例文により興味を持つのではないだろうか。さらにメッセージ性の高い英文を学ぶことで,自分があることを表現・主張したい時にそうした表現を取り入れることで説得力が増すことがある。著名人の名言,ことわざ,歌詞の一節などを取り入れることでこうした効果が期待でき,さらにその文の意味内容が自身の知識として蓄積されることになる。加えてこのような英文はリズムや語呂がよいことが多く,音声指導上の効果も期待できる。

Haste makes waste. (急ぎ過ぎは浪費を生み出す/急いで事は仕損じる)
/-eɪst/ /-eɪks/ /-eɪst/

今後は上記基盤理論を適宜補強するとともに,文法事項別の特徴に応じた良質な英文法例文のあり方についても,コミュニケーションの観点から研究を進めたい。

(4) ここまでの成果を踏まえて,英文法例文集の試作品として「ことわざ」の英文集の作成に着手した。「形・意味・活用」別の検索条件については現在以下の通りとしている。

形： 文法事項別 (a.文構造関係, b.述語動詞関係, c.それ以外), 長さ(使用語数)
意味： 日本語の意味/相当する日本のことわざ, 語彙レベル
活用： 中心トピック, 機能, 使用場面例

現在 excel 上に 1500 余りのことわざをデータベース化し,上記検索項目別の特徴入力を進めている。今後は上記検索項目について改善を進め,英文法例文検索リストに掲載すべき項目の研究を引き続き進める予定である。さらに試作品完成後は実際に使用してもらい,その意見を基にリストをさらに改善していきたい。

<引用文献>

- Celce-Murcia, M. & Larsen-Freeman, D. (1999). *The grammar book*. Boston: Heinle.
- Cook, G. (2001). 'The philosopher pulled down the lower jaw of the hen.' Ludicrous invented sentences in language teaching. *Applied Linguistics*, 22, 366-387.
- 垣田直巳(編著)(1989).『英語指導法ハンドブック 英文用例編』大修館書店.
- 加藤治之 (2009). 「必要条件としての文法指導」『英語教育』, 58(4), 27-29.
- 斎藤兆史 (2001). 『日本人のための英語』講談社.
- 白井恭弘 (2012). 『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店.
- 中條清美 (2014). SCoRE: The Sentence Corpus of Remedial English,
<<http://www.score-corpus.org/>>
- 中住幸治 (2013). 「英文法指導での例文に対する学習者・教員の意識に関する調査研究」,『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部(文化教育開発関連領域)』, 62, 227-236.
- 中住幸治 (2014). 「良質な例文使用による英文法指導の実証的研究～仮定法の場合～」『日本教科教育学会誌』, 37(2), 51-60.
- 中住幸治 (2016). 「英文法指導に適した良質な例文に関する研究～学習者の印象に残り,文法理解深化につながる英語例文～」,『第66回大会紀要 YAMAGUCHI 2016(全国英語教育研究団体連合会)』, 83-92.
- 橋本雅文 (2000). 「例文再考(内容編)」, 斎藤栄二・鈴木寿一(編著)『より良い英語授業を目指して』(pp. 93-101). 大修館書店.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中住 幸治	4. 巻 -
2. 論文標題 英文法例文の提示時期を考慮に入れた質的条件に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 深澤清治先生退職記念 英語教育学研究	6. 最初と最後の頁 200-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中住 幸治	4. 巻 15
2. 論文標題 高等学校英語教科書の改訂による文法事項・例文等の変化に関する研究 - 「英語表現」について -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Nakazumi, Yukiharu
2. 発表標題 Textbook Analysis: Grammatical Items and Topics/Functions in Language Activities
3. 学会等名 the 58th JACET International Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Nakazumi, Yukiharu
2. 発表標題 Quality of Example Sentences: Learners' Views
3. 学会等名 JALT 2019: 45th International Conference on Language Teaching and Learning (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 中住 幸治
2. 発表標題 文法事項と使用場面・機能との関連性に関する研究 高等学校検定教科書内の言語活動・対話文等より
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Nakazumi, Yukiharu
2. 発表標題 Conditions of Good Example Sentences in Grammar Learning
3. 学会等名 9th Annual Shikoku JALT Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中住 幸治
2. 発表標題 指導中の提示時期に応じた英文法例文の質的条件に関する研究
3. 学会等名 日本教科教育学会第44回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakazumi, Yukiharu
2. 発表標題 Quality of Example Sentences in SHS Textbooks
3. 学会等名 JALT 2018: 44th International Conference on Language Teaching and Learning (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中住 幸治
2. 発表標題 Quality of Example Sentences in Grammar Instruction
3. 学会等名 奈良教育大学英語教育研究会2019年2月の会（招待講演）
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 中住 幸治
2. 発表標題 高等学校英語教科書の改訂による英文法例文の変化に関する研究～新JACET 8000・CEFR-J Wordlist Ver. 3.1を用いて～
3. 学会等名 2017年度JACET中国・四国支部春季研究大会
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 中住 幸治
2. 発表標題 英語教科書「英語表現I」の改訂による文法事項・例文等の変化に関する研究
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 中住 幸治
2. 発表標題 等学校英語検定教科書内の表現活動における表現内容と文法事項の関連性並びに用例に関する研究
3. 学会等名 日本教科教育学会第43回全国大会
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 Nakazumi, Yukiharu
2. 発表標題 Comparison between ELT and MEXT-Authorized English Textbooks: Grammar in Context
3. 学会等名 JAAL in JACET 2020
4. 発表年 2020年～2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------